慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	澤瀉久敬『医学概論』における近代の超克
Sub Title	Hisayuki Omodaka's Iatrology and overcoming modernity
Author	高草木, 光一(Takakusagi, Koichi)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2013
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.106, No.1 (2013. 4) ,p.5- 30
JaLC DOI	10.14991/001.20130401-0005
Abstract	澤瀉久敬は, 日本で最初に大学医学部で「医学概論」を講義した(大阪帝国大学, 1941年)人物であるが, 彼は医師ではなく, フランス哲学研究者だった。その講義録『医学概論』全三巻(1945–1959年)は, 医学の分野において「近代の超克」を試みた思想書と捉えることができる。その特異なコント理解は, ベルクソンを後ろ楯とする実証主義批判として読むことができ, その医学思想には, 同時代のカンギレムと共通した問題意識も見いだせる。 Although Hisayuki Omodaka was the first person to lecture "Iatrology" at Medical School in Japan (Osaka Imperial University, 1941), he was not actually a doctor but rather a France philosophy researcher. All three volumes of his lecture transcripts, "Iatrology" (1945–1959), can be taken as philosophical books that attempted to "Overcome the Modern" in the field of medicine. His unique understanding of Compte may be read as a positivism critique using Bergson as support, demonstrating problem awareness in medical philosophy shared with Canguillem, his contemporary.
Notes	小特集 : 澤瀉久敬『医学概論』とその歴史的コンテクスト
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20130401-0005

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

澤瀉久敬『医学概論』における近代の超克

Hisayuki Omodaka's Iatrology and Overcoming Modernity

高草木 光一(Koichi Takakusagi)

澤瀉久敬は，日本で最初に大学医学部で「医学概論」を講義した(大阪帝国大学，1941 年)人物であるが，彼は医師ではなく，フランス哲学研究者だった。その講義録『医学概論』全三巻(1945-1959 年)は，医学の分野において「近代の超克」を試みた思想書と捉えることができる。その特異なコント理解は，ベルクソンを後ろ楯とする実証主義批判として読むことができ，その医学思想には，同時代のカンギレムと共通した問題意識も見いだせる。

Abstract

Although Hisayuki Omodaka was the first person to lecture “Iatrology” at Medical School in Japan (Osaka Imperial University, 1941), he was not actually a doctor but rather a France philosophy researcher. All three volumes of his lecture transcripts, “Iatrology” (1945–1959), can be taken as philosophical books that attempted to “Overcome the Modern” in the field of medicine. His unique understanding of Compte may be read as a positivism critique using Bergson as support, demonstrating problem awareness in medical philosophy shared with Canguillem, his contemporary.

「三田学会雑誌」106 巻 1 号（2013 年 4 月）

澤瀉久敬『医学概論』における近代の超克*

高草木　光　一

要　　旨

澤瀉久敬は，日本で最初に大学医学部で「医学概論」を講義した（大阪帝国大学，1941 年）人物であるが，彼は医師ではなく，フランス哲学研究者だった。その講義録『医学概論』全三巻（1945–1959 年）は，医学の分野において「近代の超克」を試みた思想書と捉えることができる。その特異なコント理解は，ベルクソンを後ろ楯とする実証主義批判として読むことができ，その医学思想には，同時代のカンギレムと共通した問題意識も見いだせる。

キーワード

澤瀉久敬，医学概論，オーギュスト・コント，ベルクソン，カンギレム

はじめに

澤瀉久敬（おもだかひさゆき）（1904–1995）は，1969 年 4 月 1 日，第 66 回日本内科学会において，「医師の倫理」と題する特別講演を行なっている。澤瀉にとって広義の「医学」は，「医学」，「医術」，「医道」の三つからなる総体であり，そのうちの医道は，「医学」，「医術」の実践を通して自ずと錬磨される「医道」と，固有の領域としての「医道」との二つに分けられる。後者の「医道」は，現在の言葉で言えば「医療倫理」にあたるが，現在見られるような先端医療の飛躍を必ずしも見越していない段階での「医療倫理」は，言わば「医師の心構え」的なものにとどまっている。澤瀉の挙げている「医道」は，第一に「すべての患者を，人格者として認めなければならない」，第二に，「すべての人間は人間として平等であり……したがって，医師はすべての患者をただ人間として遇すべきなのであって，そこに差別を設けてはならない」，第三に，「人間は自律的存在であるということから，……医師が自分の特権を悪用してはならない」[(1)]という 3 点である。このような一般論は，たとえば，脳死・臓器

＊　本稿は，2012 年 4 月 21 日・22 日，慶應義塾大学三田キャンパスで開催された慶應義塾経済学会ミニコンファレンス「澤瀉久敬『医学概論』とその歴史的コンテクスト」において行なった報告「澤瀉久敬『医学概論』の社会思想――「近代医学の超克」の光と陰」を基礎にしている。

(1)　澤瀉久敬『医の倫理――医学講演集』誠信書房，1971 年，オンデマンド版，2007 年，37–38 頁。

移植におけるドナー側の人権とレシピエント側の人権の対立といった，現在の生命倫理が抱えている先鋭な問題を前提にしていない。誰もが否定できないような普遍的な事柄，つまりは誰でも言えるような凡庸な内容が語られているに過ぎないとも言える。学会の「特別講演」が，最先端の論点を回避した記念的なものになることは珍しくない。

しかし，講演者である澤瀉が医師ではなく，医療現場に足を踏み入れたことのない人間であることを考えれば，この講演は別の意味合いを帯びてくる。非医師が，壇上から医師という専門家集団に向かって「医師たるものの心得」を語ることはまずありえない稀有な事例だろう。

この講演が行なわれた 1969 年は，「医学」をめぐって大きな問題が噴出していた。入試中止という非常事態まで招いた 1968–69 年の東大闘争は，医学部の問題を発端にしている。東大病院内の事件で処分された医学部学生のうちの一人が当日久留米にいたアリバイが主張され，現地に派遣された医学部講師二人の調査でそれが確認されたにもかかわらず，処分が撤回されなかったことから，闘争は全学的な広がりをもつに至る。その背景には，「インターン」という無給助手制度，さらには大学医学部，医学界の権威主義的体制に対する学生側の大きな不満があった。東大助手共闘の最首悟（1936–）は，『朝日ジャーナル』1969 年 1 月 19 日号に「砦の狂人と言われようとも——自己を見つめるノンセクト・ラジカルの立場」を寄せ，そこで「医者は患者を待ちかまえているだけでよいのか」と「医師のあり方」に関する根源的な問いを投げかけた。患者を治療して社会に帰すだけならば，医者は，病気の一因となっている社会の矛盾を事実上隠蔽する役割を担う存在になっているのではないか。この重い問いを真摯に受けとめたのが，久留米に派遣された医学部講師のうちの一人，高橋晄正（1918–2004）だった。高橋は，『社会のなかの医学』の冒頭に，最首の問題提起を掲げ，「この問いにたいして，わたくしたちはいま，誠実に答えなければならない[(2)]」と述べている。

澤瀉には東大闘争や学生運動に対する格別の思い入れがあったとは思えないが，こうした問題提起に呼応するかのように，1969 年のこの講演のなかで医学の社会性について言及している。「医師はただ自分に診療を求めてくる患者のことだけ考えておればよいというものではなく，すべての医師は自分の生きる地域や，自分の国や，さらに一般的には，すべての人間の健康について社会的な使命をもつ[(3)]」とし，「公害による病人をどのように治療するかということよりも，公害そのものをなくすることが大切[(4)]」であるとして，「医師が介入しない医療」，つまり「医療行政」をも「医道」のなかに含めている。澤瀉の問題意識の社会性は，その「医学概論」の特徴の一つでもあった[(5)]。最首の問題提起のずっと以前から，「医療行為の社会性」が澤瀉の視野に入っていたことには瞠目すべき

(2)　高橋晄正『社会のなかの医学』東京大学出版会，1969 年，ii 頁。
(3)　澤瀉『医の倫理』，27 頁。
(4)　同書，28 頁。
(5)　「医学が単なる自然科学ではなく社会科学でもなければならぬ」ことを，澤瀉は『医学概論　第三部　医学について』の冒頭で強調している。澤瀉久敬『医学概論　第三部　医学について』東京創元社，1959 年，オンデマンド版，誠信書房，2007 年，16 頁。

だろう。

もう一つ，医学界を揺るがす事件がこの頃起きている。1968 年 8 月 8 日，札幌医科大学で和田寿郎（1922–2011）教授が日本で初の心臓移植手術を執刀した。1967 年に南アフリカ共和国で世界初の心臓移植手術が実施されると，その後各国で競うように手術が行なわれている。和田移植では，当初はレシピエントの 20 歳の青年は予後良好と言われ，マスコミの報道は祝賀ムードだったが，術後 83 日の 10 月 29 日にその患者が死亡すると，次々に和田移植に対する疑問が浮かび上がってくる。ドナーとなった 18 歳の青年に対して充分な救命措置は施されたのか，レシピエントは心臓移植以外に救命手段のないほど重篤な容態だったのか，根源的な問題が追及されはじめた。ついには，1968 年 12 月，和田は殺人罪等で刑事告発されるに至る。「医の倫理」が厳しく問われた事件だった。

澤瀉は，レシピエントが死亡する以前から臓器移植の問題点について積極的な発言を行なっている。『朝日新聞』1968 年 8 月 17 日夕刊「みんなの科学」欄は，和田移植後まもない段階で，移植による「救命」という光の面の裏側に早くも切り込んだ。その記事の冒頭に登場する澤瀉久敬は，「死を定義している本はほとんどない。医学生がそれを教えられることもまずなかったといえる」と発言し，ドナーの「死」をどのように定義するのかが，臓器移植の最大の問題点であることを言明している。同年 9 月に執筆された論考でも，一貫して「死の定義の不在」を問題視し，「脳死」に関しては「脳死とは何かということ自体を解剖学的，生理学的にまずはっきりとさせておくことが絶対に必要である[(6)]」と説き，「〔移植〕手術に都合のよい定義を行なったり，手術実施に好都合な法律をあわただしく制定するなどということ[(7)]」を厳に戒めている。

このような二つの背景を見れば，非医師が医師に向かって「医師たるものの心得」を説くことの奇妙さの印象は幾分とも薄まってくる。「医療の社会性」という問題が広く問われた稀有な時代に，澤瀉の社会的存在の重要性もまたクローズアップされた。

澤瀉の側に即して言えば，日本内科学会から特別講演を依頼されたのは，大阪大学医学部における長年にわたる「医学概論」講義，およびその成果としての『医学概論』全三巻の刊行という業績に対する敬意からであることは間違いない。ちょうど 1968 年 3 月に澤瀉は大阪大学を定年退官し，27 年間務めた大阪大学医学部での「医学概論」の担当を下りたばかりである。つまり，澤瀉の説く「医師たるものの心得」は，たとえ凡庸に見えようとも 30 年近くにわたる彼の医学概論研究に裏打ちされたものだった。

「すべての患者を人格者として認めなければならない」という第一のテーゼは，医療者がもつべき六面的「人間」観を前提にしている。第一に「物体」，第二に生命のある物体，すなわち「生物」，第三に「意識をもった生物」，第四に自己の意志をもって自主自立する「独立者」，第五に他人と協同生

---

(6)　澤瀉久敬「心臓移植に関する二，三のこと」，『看護学雑誌』1968 年 11 月号，79 頁。
(7)　同，80 頁。

活を営む「社会人」，そして第六に「社会的に生きながら，死ぬときはひとりびとり，ひとりぼっちで彼の世に旅立ってゆかねばならぬ孤独な存在として，自己の生を悩み，死におののく自覚的存在者」[8]，つまり「思想者」という六面をもつ存在として，医療者は患者に接しなければならないと澤瀉は説く。つまり，患者を一個の人格をもった存在として遇する（第四規定）のはもちろんのこと，社会的にどのような役割を果たし（第五規定），またどのような死生観をもっているか（第六規定）まで考えて，治療を行なわなければならない，というところまで踏み込んでいると思われる。逆に言えば，患者を「物体」，「生物」，「意識をもった生物」程度にしか見ない医学・医療に対する痛烈な批判意識の表明であると受け取ることができる。

「すべての患者を平等に扱わなければならない」という第二のテーゼには，「医道」の社会制度的側面が含意されている。医師・医療者の倫理たる「医道」は，主体の主観的善意や努力によってのみ達成されるものではなく，そうした営為を支える社会制度との一体的改革が表明されていた。国民皆保険制度が達成される以前の段階において，「治療の平等」のための「医療費全額国庫負担」をすでに提唱している[9]ことからも明らかなように，制度的保障に支えられてこそ「治療の平等」は実現されると澤瀉は考える。

第三の「医師は特権を悪用してはならない」というテーゼは，医師と患者の間の絶対的な権力関係の存在を前提にしたものである。その絶対的な権力構造を打破するためにアメリカで起こったのが，患者の権利運動としてのバイオエシックスであり，具体的には「インフォームド・コンセント」の要求だった[10]。この概念が日本に導入されるのは 1980 年代のことであるから，澤瀉が直接的に問題の所在を知りえていたとは思えないが，「医学概論」研究を通して独自に，事実上「インフォームド・コンセント」に近いところにまで問題意識が到達していたと見ることができる。

このように，現在の目で見れば凡庸な内容としか見えない 1969 年の澤瀉の講演には，さまざまな含意があった。同じことは，おそらく澤瀉の他の著作にも当てはまる。澤瀉『医学概論　第一部　科学について』は，科学についての通り一遍の概論のように見えて，そこには『医学概論』全三巻を貫く壮大なモチーフが隠されていたと考える。澤瀉久敬が「医学概論」講義および『医学概論』によって，何を思想的に目指したのかを，その限界も含めて明らかにすることを本稿の目的としたい。

---

(8)　澤瀉『医の倫理』，8 頁。

(9)　澤瀉『医学概論　第三部』，301 頁。なお，この点は，最首悟がつとに指摘している。最首悟「「いのち」から医学・医療を考える」，高草木光一編『思想としての「医学概論」——いま「いのち」とどう向き合うか』岩波書店，2013 年，237 頁。

(10)　アメリカにおけるバイオエシックスの成立と展開については，たとえば，木村利人『いのちを考える——バイオエシックスのすすめ』日本評論社，1987 年，参照。日本へのバイオエシックスの導入については，香川知晶「生命倫理研究の開拓者たち」，高草木光一「岡村昭彦とバイオエシックス」，安藤泰至編『「いのちの思想」を掘り起こす——生命倫理の再生に向けて』岩波書店，2011 年，参照。

I 「医学概論」講義

澤瀉久敬は，京都帝国大学文学部および大学院で，西田幾多郎（1870–1945），田辺元（1885–1962），九鬼周造（1888–1941）らに師事して，哲学を専攻した。卒業論文にはフランスの哲学者メーヌ・ド・ビラン（Pierre Maine de Biran, 本名：Marie François Pierre Gontier de Biran, 1766–1824）を対象として選び，1935 年 10 月から 1937 年 12 月までフランス政府給費留学生としてパリに留学している。その留学中に，弘文堂書房西哲叢書の一冊として，最初の著作『メーヌ・ド・ビラン』（1936 年）を上梓している。帰国直後の 1938 年春に京都帝国大学文学部講師となり，1941 年には京都哲学会の機関誌『哲学研究』の編集を委嘱され，フランス哲学研究者としての道を邁進していた。[11] ところが，1941 年 3 月 30 日付の書簡で，フランス留学中にたまたま知遇を得た大阪帝国大学医学部教授（生理学専攻）の久保秀雄（1902–1985）から，同医学部での「医学概論」講義を担当するよう要請され，[12] 結局，翌 4 月下旬には講義を開始している。そして，これが日本の大学医学部における最初の「医学概論」講義となった。

澤瀉はその後大阪大学文学部教授となり，ベルクソン（Henri Louis Bergson, 1859–1941）をはじめとするフランス哲学研究に従事し，晩年の 1986 年には日本学士院会員に推挙されている。しかし，同大学医学部での「医学概論」講義は 1968 年 3 月に定年退官するまでつづけられた。その成果が，「科学について」，「生命について」，「医学について」の全三巻よりなる『医学概論』（創元社，東京創元社，1945–1959 年）である。

さて，そもそも大阪帝国大学医学部が「医学概論」を設置するに至った経緯も，また「非医師」の澤瀉が大阪大学医学部で「医学概論」を講じるようになった経緯も必ずしも詳らかではない。大阪大学医学部で長年の教歴をもつ野村拓（1927–）は，1941 年 3 月 6 日の医学部教授会「学科課程改革委員会趣旨」に基づいて，「医学概論」と「国家国防医学」が新しい科目として導入されたとしている。その改革案に「教と学とをかねての職域に於ける実践的迫力の高揚を学風として進軍ただ進軍あるのみ」と記されていることから，「『医学概論』は進軍ラッパのしたで誕生したのである」と結論づけている。[13] しかし，もちろん「医学概論」という新しい科目への学問的な期待が内部にあったことも確かだろう。[14] また，久保秀雄が澤瀉を推薦し，澤瀉がともかくも引き受けたのには，何らかの「根拠」があったと見るべきだろう。公開されている資料で類推するかぎり，当時澤瀉と医学

（11） 澤瀉の経歴等については，澤瀉久明編『命——澤瀉久敬追想集』（私家版，1997 年）を参照。

（12） 天理大学附属天理図書館編『澤瀉久敬蔵書目録』天理大学出版部，2002 年，416 頁，参照。

（13） 野村拓「戦争と医療——戦時下の医学思想と医療政策」，『15 年戦争と日本の医学医療研究会会誌』3 巻 2 号，2003 年 5 月。

（14） 佐藤純一「近代医学・近代医療とは何か」，高草木編『思想としての「医学概論」』，96–97 頁。

を結びつけるものはメーヌ・ド・ビラン研究以外にないように思われる。

メーヌ・ド・ビランは，デカルトの心身二元論を乗り越えようとした生命論，身体論の先駆的な哲学者として知られる。後に見るように，澤瀉『医学概論』の思想史上の一つの目的は，デカルトおよびデカルトを基礎とする近代医学批判にあり，したがって，メーヌ・ド・ビランはとくに『医学概論　第二部　生命について』において澤瀉が「二元的一元性」という概念を提示する際に縦横に使われている。(15)

また，メーヌ・ド・ビランは，哲学者であると同時に政治家であり，行政官だった。1766 年に，フランス南西部のドルドーニュ県ベルジュラック（Bergerac）に生まれたビランは，19 歳のときにパリに出て近衛隊に入る。1789 年フランス革命勃発後，一時故郷に戻るものの，1794 年テルミドールのクーデタによるロベスピエール（Maximilien Robespierre, 1758–1794）失脚後，ドルドーニュ県議会議員，ベルジュラック郡長，立法議会議員等の役職を歴任している。この政治的経歴のなかで，ベルジュラック郡長時代に着目すると，郡長に就任した 1806 年に，内科医や外科医，薬剤師や保健官などのグループとともにベルジュラック医学協会を設立し，その初代会長に就任している。メーヌ・ド・ビランは医師の子どもとして生まれたが，自身は医師ではない。

1807 年 1 月 15 日に開催されたベルジュラック医学協会第一回会合では，医学・医療と他の諸科学の協力・連携について演説し，とくに医学と哲学との関係について強調している。(16) 澤瀉は，1836 年の著作でこのベルジュラック医学協会について言及している(17)ことから，「医学概論」講義という自分に降りかかってきた運命をさほど奇異なものとは思わなかった可能性もあるだろう。

このようにして，フランス哲学研究者によって日本の大学医学部における本格的な「医学概論」講義が始まり，そしてその成果として『医学概論』三部作が世に問われることになったが，その講義も講義録も，後世の評価を獲得しているとは言い難い。それどころか，いまや澤瀉の名前すらほとんど忘却の彼方と言ってもいいだろう。

澤瀉『医学概論』第一巻が，敗戦直後の 1945 年 11 月に刊行されると，大きな反響を呼んだと言われている。(18) 本書に対しては，浦本政三郎（1891–1965），三枝博音（1892–1963）による書評が『医学のあゆみ』（1 巻 1 号，日本医歯薬出版社，1946 年）に掲載されたほか，『日本医事新報』（1245 号，

---

(15) デカルトに対するメーヌ・ド・ビランの「二元的一元性」概念については，澤瀉久敬『仏蘭西哲学研究』勁草書房，1960 年，226 頁以下に詳しい。

(16) “Discours d’ouverture de la société médicale de Bergerac, prononcé par le sous-préfet de l’arrondissement de Bergerac, président de la société, dans la 1er séance qui a eu lieu le 15 janvier 1807,” *Discours à la société médicale de Bergerac, Œuvres de Maine de Biran*, tome V, édité par François Azouvi, Paris: J. Vrin, 1984, p.7.

なお，ベルジュラック医学協会に関しては，次を参照。Pierre Lemay, *Maine de Biran et la Société médicale de Bergerac: d’après le registre des séances et les rapports inédits*, Paris: Vigot, 1936.

(17) 澤瀉久敬『メーヌ・ド・ビラン』弘文堂書房，1936 年，54 頁。

1948 年 2 月 21 日）では「『医学概論』を語る」というテーマで 26 名の大座談会が催されている。座談会には，澤瀉は参加せず，また澤瀉の名前も頻繁に出てくるわけではないが，もちろん，その前提となっているのは，澤瀉『医学概論　第一部』である。澤瀉の著作のインパクトが大きかったことは確かだろうが，しかし，非医師の出席者がいたものの，座談会の方向が自ずと医師による「医学概論」へと導かれていったように，澤瀉への敬意は全体に抑えられていた。

澤瀉『医学概論　第一部』刊行以後の「医学概論」関係出版物において，澤瀉の著作は実際にどのように扱われているのか。現在，天理大学附属天理図書館に所蔵されている旧澤瀉久敬蔵書（天理図書館編『澤瀉久敬蔵書目録』）に基づき現地調査した結果，澤瀉無視の医学概論の歴史という相が浮かび上がってきた。以下にリストを掲げる。

①大行慶雄『医学汎論』杏林書院，1949 年。
②佐々貫之・懸田克躬編『医学概論』南山堂，1951 年。
③秋元寿恵夫『医学概論——病むとはいかなることか』河出書房，1952 年。
④別所彰・別所浩次『人間医学概論』医学書院，1953 年。
⑤高橋明『医学概論』メヂカルフレンド社，1954 年。
⑥大塚弘『医学原論——医の文化価値とその限界』厚生問題研究会，1966 年。
⑦高橋晄正『現代医学概論』東京大学出版会，1967 年。
⑧日本医師会編『医師倫理論集』金原書店，1968 年。
⑨川喜田愛郎『病気とは何か——医学序説』筑摩書房，1970 年。
⑩中川米造『医学をみる眼』日本放送出版協会，1970 年。
⑪橋本義雄『医学通論』金原出版，1974 年。
⑫砂原茂一『臨床医学の論理と倫理』東京大学出版会，1974 年。
⑬馬場和光『医学概論』英玄社，1975 年。
⑭中川米造『医学的認識の探求』医療図書出版社，1975 年。
⑮宮本忍『医学とは何か——新しい医学論の提唱』南江堂，1977 年。
⑯中川米造『医の倫理』玉川大学出版部，1977 年。
⑰長木大三ほか『医学概論・関係法規』講談社，1979 年。
⑱川喜田愛郎ほか『医学思想と人間』朝倉書店，1979 年。
⑲川喜田愛郎『医学概論』真興交易医書出版部，1981 年。
⑳日野原重明『医学概論』第 4 版，医学書院，1982 年。

（18） 澤瀉『医学概論　第一部　科学について』（創元社，1945 年）の反響については，次を参照。佐藤純一「いのち・病い・死・癒しの語りべ——中川米造」，安藤泰至編『「いのちの思想」を掘り起こす——生命倫理の再生に向けて』岩波書店，2011 年，117 頁。川喜田愛郎・佐々木力『医学史と数学史の対話』中公新書，49 頁。

㉑花岡清助『医学概論』金原出版，1983 年。

㉒北里大学病院・医の哲学と倫理を考える部会編『医の心——医の哲学と倫理を考える』全 7 冊，丸善，1984–1990 年。

㉓池辺義教『医の哲学』行路社，1986 年。

㉔唄孝一編『医の倫理』日本評論社，1987 年。

㉕中田陽造『医学概論』大阪大学大学院集団社会医学部門，1990 年。

㉖池辺義教『医学を哲学する——医学，この問題なるもの』世界思想社，1991 年。

このうち，⑭，⑯，㉓，㉕，㉖は，澤瀉の関係者であるから除くとして，他の著作には，ほとんど澤瀉の著作は現れてこない。文献リストに挙げられていない場合さえある。唯一の例外と言えるのが，⑲の川喜田愛郎『医学概論』である。

「本邦におけるこの道の先達，澤瀉久敬博士に倣って，『医学概論』という言葉を『医学とは何か』を問いつめる作業と理解するならば，当然それは長い間医学の畑ではたらき続けてきたわたくしにとって常住念頭を去らない問題である……澤瀉博士があの先駆的な三部作『医学概論』——頂戴したその初版が今もわたくしの書架を飾っているのだが——以来四半世紀をこえる長い間，この領域で燃やし続けてこられた情熱とそのかずかずのお仕事に心から敬意を表したい」[19]。

川喜田愛郎（1909–1996）は，東京大学医学部卒業後，千葉大学医学部教授，学長を務め，とくに細菌学の権威として知られている。また，上下二巻からなる浩瀚な『近代医学の史的基盤』（岩波書店，1977 年）という医学史の著作があり，医学概論関係の著作も多い。医学界のいわば中心にいる人物だけが澤瀉を認めたことになるが，川喜田が澤瀉の著作を批判的に摂取して自説を組み立てたということではない。川喜田『医学概論』の本文中には，澤瀉の影響は見いだせない。近代医学への批判的まなざし，医療倫理の追求という大きな枠組みにおいては，両者は認識を共有する部分をもっているものの，川喜田は，澤瀉の本領が発揮される科学論や生命論の領域には敢えて足を踏み入れないし，医学論に関しては澤瀉の素人的な所論を一蹴していると言ってよい。

おそらく澤瀉にとって，医学界からの反発は予想の範囲内であったろうと思われる。澤瀉の正統的な近代医学に対する姿勢は，「ウィルヒョウ，アショッフ以来，西洋医学の主流は細胞病理学であったし，現在もそうであると思う。しかし，病気をいかに考えるかについては歴史的に様々な立場があったのであり，また最近新しい学説も発表されている」[20]，あるいは「西洋医学だけを唯一の可能な医学としてそれにのみ絶対的信頼をおいてはならない」[21]，という言葉に端的に表現されている。

---

(19) 川喜田愛郎『医学概論』真興貿易出版社，1982 年，ちくま学芸文庫，2012 年，3–5 頁。

(20) 澤瀉『医学概論　第三部』，74 頁。

非医師であるからこそなしえた，近代医学に対する徹底的な批判の書として澤瀉『医学概論』は捉えるべきであり，澤瀉無視の医学概論の歴史は，それ自体，澤瀉にとって決して不名誉なことであるとは思われない。[22]

大阪大学医学部における澤瀉「医学概論」の後継者中川米造（1926–1997）は，中川米造・本多正昭・伊藤幸郎「シンポジウム・医学概論の現状と展望」（『医学哲学医学倫理』2 号，1984 年）において，「医学概論」の五類型について説明している。この類型は，同時に歴史的経過をも示し，したがって，澤瀉「医学概論」を歴史的に位置づける意味ももっている。

最初期に現れたのが，明治期の「医政論的」類型で，学長，医師会長などが行なうもの，つづく「医道論的」類型もまた，行為の原則を指示するもので，同様に訓辞型である。第三の「生物哲学的」類型は，生物の本質を明らかにするもので，近衛・東條内閣の文部大臣で，「全機性の哲学」の橋田邦彦（1882–1945），『医学ト哲学』（吐鳳堂，1908 年）の著者にして，日本民族衛生学会会長を務めた永井潜（1876–1957）などに代表される。教養型と言ってもよい。第四は，「医哲学的」類型で，昭和初頭から 20 年代までの哲学への関心を背景にしている。澤瀉久敬がその代表である。最後に，「社会医学的」類型が登場する。さまざまな問題を多様な切り口で考察するもので，オムニバス形式や学生参加型などの方向性をもつ。[23]

中川の説明を見るかぎり，1980 年代の時点で，すでに澤瀉的な「医学概論」は古びたものになってしまっていることになる。1980 年代以降，先端医療に関するさまざまな問題は，生命倫理学において扱うようになり，中川の言う「社会医学的」類型との境界線も曖昧になっていく。また，澤瀉－中川の大阪大学医学部における「医学概論」講義は，継承者に恵まれないという不運もあった。

現在，最も「医学概論」に力を入れているのは産業医科大学と目されるが，そこで行なわれている「医学概論」は，同大学名誉教授，伊藤幸郎（1934–）によれば，「医学生のための綜合的人間学」であると規定されている。すなわち，ロジャー・ウィリアムズ（Roger Williams, 1931–）が提唱した「保健・教育・結婚・犯罪・人種的偏見など，人間に関する一切の社会問題に関する綜合的な研究」を意味する〈Humanics〉を念頭に置いた，〈Humanics for medical students〉の構想である。[24] 言わば，医学生のための教養講座であり，近代医学を批判的に読み抜こうとした澤瀉の意図とは遥か

（21） 澤瀉久敬『医学概論　第一部　科学について』誠信書房，新装版，2000 年，12 頁。

（22） なお，現在にまでつづく澤瀉への無関心は，澤瀉に言及した研究論文の少なさからも確認することができる。澤瀉を主題的に扱ったものとしては，杉岡良彦「澤瀉久敬の医学概論と現代医学」（『医学哲学医学倫理』23 号，2005 年），杉岡良彦「澤瀉久敬の医学概論と残された課題」（『旭川医科大学紀要』27 号，2011 年），の二つ程度しか挙げることができない。

（23） この五類型については，次も参照。中川米造『医学の弁明』誠信書房，1965 年，4–22 頁。佐藤純一「近代医学・近代医療とは何か」，高草木編『思想としての「医学概論」』，81–89 頁。

（24） 伊藤幸郎「医学部における人間教育——医学概論教育の実践を振り返って」，『医学哲学医学倫理』19 号，2001 年。次の論文も参照。伊藤幸郎「本学における医学概論（総合人間学）の将来展望——研究・教育の両面から」，『産業医科大学雑誌』7 巻 3 号，1985 年。

に遠いところに「医学概論」は行ってしまったことになる。

II　コント理解と「近代の超克」

澤瀉久敬は，1986 年 12 月，82 歳にして日本学士院会員に推挙され，1995 年 2 月 26 日，90 歳で天寿をまっとうしている。澤瀉の推挙に尽力したのは澤瀉と同窓で科学史・芸術史の東京教育大学名誉教授，下村寅太郎（1902–1995）と言われるが，その下村は澤瀉の一月前に逝去し，日本学士院会員として澤瀉の弔辞を読んだのは，同じ京都大学哲学科出身ながら，ハイデガー（Martin Heidegger, 1889–1976）研究者として知られる京都大学名誉教授・辻村公一（1922–2010）だった。

「澤瀉先生はデカルト以来現代のフランス哲学に到るまでの歴史に精通していられましたが，先生が特に尊重していられた哲学者は，ルネ・デカルト，メーヌ・ド・ビラン，オーギュスト・コント，アンリ・ベルクソンの四人であります。……前記の四人の哲学者のうち，暫くコントを差し控えますならば，デカルトもビランもベルクソンも各々の仕方で精神と身体（従ってまた物体）との二元性を一方に於て主張しながら，他方に於て両者の合一を認めておりました。そこから先生は御自分の哲学的立場を，動的『二元的一元性』として確立されるに至ったと思われます。それに対して『社会学』の命名者にして創立者であるコントは，周知の如く人間の精神もしくは知識が，『神学的・架空的状態』から発し『形而上学的・抽象的状態』を経て今日では『科学的・実証的状態』に入りつつあると考えました。先生はコントを『今日の実証科学が彼によって理論的に基礎づけられた』として賞賛されると共に，前期の『三つの状態の法則』を，コントのように人間の知識の時間的な発展方向を示すのみならず，『人間の知識の三つの型をも示す』と解釈されます[25]」。

大阪大学文学部における澤瀉門下生で，澤瀉『医学概論』の精神を独自に引き継いだ池邉義教（1926–）は，「ベルクソンとデカルトそれこそ澤瀉哲学の二本柱であります[26]」と弔辞で述べている。メーヌ・ド・ビランについては，1936 年の著作『メーヌ・ド・ビラン』がある。この三者が澤瀉の主要な研究対象であることには異論を唱える余地はないが，コント（Auguste Comte, 1798–1857）について辻村が強調している点に留意したい。ここで辻村が述べている澤瀉のコント理解は，『医学概論　第一部　科学について』において展開されたものである。辻村は，ともかくも澤瀉『医学概論』のなかで，コントの理解，解釈に澤瀉の格別の独自性を認めたことになる。辻村の見解が正鵠を射るものであるかどうかの判断はとりあえず留保するとしても，『医学概論　第一部』をコント論

(25)　辻村公一「故澤瀉久敬会員追悼の辞」，『日本学士院紀要』50 巻 2 号，1996 年，95–96 頁。澤瀉久明編『命』，321 頁。

(26)　池邉義教「弔辞」，澤瀉久明編『命』，315 頁。

として読むことは可能であり，かつ正当であると思われる。

澤瀉『医学概論　第一部』は八つの章に分かれ，一　ロゴスとパトス——真理への意志／二　実証科学／三　実験／四　フィジィクとメタフィジィク／五　延長の自然学／六　古典的物理学／七　現代の物質観／八　実証と直観，という構成になっている。事実上の序にあたる「一　ロゴスとパトス」の後，「二　実証科学」で取り上げられているのが，自然科学の方法を人間の科学にまで適用して，実証主義を創始したと言われる社会学者オーギュスト・コントである。次の「三　実験」においては，コントの影響を受けて，医学の実験に自然科学的方法を適用したと言われるクロード・ベルナール（Claude Bernard, 1813–1878）が扱われている。そして，最後の「八　実証と直観」において再びコントが論じられるという構成になっている。澤瀉は，「科学概論」として『医学概論　第一部』を書いたのではなく，あくまで全三巻として構想された『医学概論』の第一部として「科学」を取り扱っている。人間（ヒト）を対象とする医学の方法論として，自然科学の方法を適用できるのか，がその問題意識であろう。

しかし，なぜ澤瀉はコント三段階論を「型」として把握しようとするのか。「コントにあってはこの法則は人智の発達方向を示しているのに対し，我々はそれは同時に人間の知識の三つの型をも示していると考えたいのである[27]」と澤瀉は結論を言うのみで，そこには何らの解説も解釈もない。「考えたいのである」という表現は，コントの解釈としては無理があることを承知のうえで，いわば超越的な理解を示しているとも言える。

コント三段階論は，基本的には歴史法則であり，それを無視して，時間を捨象した単なる「型」の問題に直ちに還元することはもちろん暴論の誹りを免れない。澤瀉の主張を通すためには，当然コントに即した一定の手続きが必要になるだろう。

また，数学，天文学，物理学，化学，生物学，社会学の順序に実証的段階に到達するとする「科学分類の法則」についても，澤瀉は独自の認識を示している。「この内からの認識方法，それが正しい意味の直観に他ならない。……直観は決して神秘的な認識方法ではない。それはまさに事実把握の一つの方法なのである。否，それこそ真に事実そのものに迫りゆく方法である。実証と直観は一つのものなのである[28]」「もちろん，実証の意味をここまで拡げるためには我々はコントの思想を徹底しなければならない。……芭蕉の言葉に『松のことは松に習え，竹のことは竹に習え』というのがある。この対象に成りきること，それが実証的態度であり，真の直観はそこに生まれる[29]」。

コントについて少しでも学んだ者であれば，あまりの「曲解」ぶりに驚くだろうし，そもそも辻村公一の澤瀉評価は何だったのかという疑問も湧いてくる。実証主義は，本来，観察科学の方法であり，対象を外側からモノとして見ることが基本である。それを直観による内在的理解という対極

(27) 澤瀉『医学概論　第一部』，36 頁。
(28) 同書，125–126 頁。
(29) 同書，126 頁。

に説明抜きに置き換えることは一般的にはありえない。

澤瀉が三段階論を「型」として強引に読み替えようとするのは，物理化学の方法を生理学や医学に直接的に応用することを拒否するためだろう。澤瀉のコント批判の行く末には，眼前の支配的医学である「物理化学的機械論的分析的医学」への根源的な懐疑があり，それに対抗する「綜合医学，全体医学」[30]の可能性が示唆されている。そのための伏線として，三段階論を発展法則としてではなく「並行的な三つの方法」と解釈しようとし，「科学分類の法則」に従って諸科学が数学，物理，化学に倣って実証的段階に向かうことが拒否されている。それと深く関連しているが，もう一つ，澤瀉の問題意識には『医学概論　第一部』には登場しないベルクソンの影を明確に見てとれる。実証主義を直観による内在的理解と結びつけるのは，コントをベルクソンに可能なかぎり引きつけて解釈したいという願望の現れと見ることができるだろう。

コント「三段階の法則」の原型は，一般的にサン－シモン（Claude Henri de Saint-Simon, 1760–1825）のなかに見いだすことができると言われているが，同時に復古王政期というフランス史の一局面がそこには刻印されている。1789 年以降のフランス史は，立憲君主政，共和政，独裁政，帝政等を経て，王政へと回帰してゆく。単純な啓蒙史観では捉えがたい現実のなかで，コントは師サン－シモンに倣って，現実を歴史発展のなかに位置づけ，未来を展望することを試みる。それが，処女作『社会の再組織化に必要な科学的作業のプラン』（1822 年）である。

コントはそこで，フランス史の跛行的な展開，つまりフランス革命以前の原理とフランス革命の原理とが混在している状況認識から議論を始めている。すなわち，「国王」と「人民」の理論を対比しつつ，「国王にとって社会の再組織とは，封建的・神学的組織の全面的な無条件の再興」[31]であり，他方「人民の抱いている支配的意見の特徴は，一つの社会組織が本当のまとまりを持つために満たすべき基本的条件を全く無視している点にある。彼らの意見とは，封建的・神学的組織を破壊するに役立った批判的原理を，そのまま組織の原理として提出すること，すなわち言いかえると，旧組織に単なる修正をいくつか加えて，新しくつくるべき組織の基礎とすることだけである」[32]として，双方を斥けている。前近代的な「神学的段階」とそれを批判する近代的な「形而上学的段階」の双方を乗り越える新しい立場を提示しようとした。この時期，ギゾー（François Guizot, 1787–1874）やロワイエ－コラール（Pierre-Paul Royer-Collard, 1763–1845）らの「純理派（doctrinaires）」もまた，「君主主権」と「人民主権」という二つの原理の対立に直面し，そこから「理性主権」という折衷的な理論を提示している[33]。コントの場合は，折衷するのではなく，両者をともに乗り越える方向

（30） 澤瀉『医学概論　第三部』，89 頁。

（31） Auguste Comte, “Plan des travaux scientifiques nécessaires pour réorganiser la société, ” *Œuvres d’Auguste Comte*, Paris: Ed. Anthoropos, réimp., 1970, tome X-B, p.48. 霧生和男訳，清水幾太郎編『コント　スペンサー』中公バックス，1980 年，52 頁。

（32） *Ibid.*, pp.51–52. 霧生訳，55 頁。

を模索した。それがいまだ政治的には達成されていない「実証的段階」である。

コントの三段階論は，サン－シモン主義者の「交替史観」の類型として把握することができるだろう。サン－シモン主義者たちは，サン－シモンの死後，師の学説の普及のために結集し，師の歴史観を「組織の時代」と「批判の時代」の交替史観として定式化している[34]。原始共産制（組織の時代）→ギリシア・ローマの古典時代（批判の時代）→中世（組織の時代）→近代（批判の時代）と人類史は発展してきたと捉え，中世における「組織」を，宗教革命からフランス革命に至る「批判」を経て，新たな次元で再構築することが彼らの歴史的課題として意識されている。コントの三段階論は，サン－シモン主義者による交替史観の定式化以前にできあがっているものの，後者の交替史観の中世以降に相当すると見なすことができる。つまり，神学的段階は，中世的な秩序と組織の段階，形而上学的段階は，フランス革命に代表される批判と破壊の段階を意味し，実証的段階はこれから構築されるべき新たな秩序と組織の段階である。コントの処女作のタイトル「社会の再組織化に必要な科学的作業のプラン」を気をつけて見れば，社会の「組織化（organiser）」ではなく「再組織化（réorganiser）」であることが重要なポイントになる。フランス革命以前にあったさまざまな中間団体が，革命の過程のなかですべて「特権的団体」として根こそぎ廃絶されたことが背景としてあり，19 世紀フランスの思想家たちは新たな関係性，協同性を構築するためにさまざまな社会改革プランを提示した。コントは，サン－シモンと同様に中世に対して一定の評価をしていると見なすことができ[35]，その意味で三段階論は直線的な発展段階論ではない。

さらに，「三つの段階」から「三つの型」へという澤瀉の発想は，コントとサン－シモン主義者との間の緊張関係にも関わってくる。

サン－シモン主義者たちが「サン－シモン学説解義」の連続講演会を開催したのは 1828 年 12 月 17 日で，第一年度は以後ほぼ 2 週間ごとに，1829 年 8 月 12 日まで計 17 回開催されている[36]。一方，コントは，1826 年から自宅で「実証哲学講義」を開催していたが，一時期自殺を企てるほどの不

---

(33) 高草木光一「ルイ・ブラン『労働の組織』と七月王政期のアソシアシオニスム（上）」，『三田学会雑誌』87 巻 3 号，1994 年，参照。

(34) *Doctrine de Saint-Simon, Exposition, Première année, 1829*, nouvelle édition publiée avec introduction et notes par C. Bouglé et Elie Halévy, Paris: Marcel Rivière, 1924, pp.157–222. 野地洋行訳『サン－シモン主義宣言――「サン－シモンの学説・解説」第一年度，1828–1829』木鐸社，1982 年，35–81 頁，参照。

(35) cf. Saint-Simon, “De la réorganisation de la société européenne, ou de la néccesité et des moyens de rassembler les peuples de l’Europe en un seul corps politique, en conservant à chacun son indepéndence nationale (1814),” *Œuvres complètes*, édition critique présentée, établie et annotée par Juliette Grange, Pierre Musso, Philippe Régnier et Franck Yonnet, 4 vols., Paris: P.U.F., 2012, tome II, pp.1255–1256. 森博訳「ヨーロッパ社会の再組織について」，森博編訳『サン－シモン著作集』恒星社厚生閣，1987 年，第 2 巻，210 頁。Auguste Comte, “Sommaire appréciation de l’ensemble du passé modern (avril 1820),” *Œuvres d’Auguste Comte*, tome X-B, pp.4–46.

調に陥り，1829 年 1 月 4 日にその講義を再開した。ちょうど二つの試みは時期的に重なり，聴講者もまた，数学者のフーリエ（Joseph Fourier, 1768–1830）やパリ臨床学派の医師ブルセ（François Broussais, 1772–1838）をはじめとして幾人かが重なっていたと言われている。[37]

サン－シモン主義者たちは，アンファンタン（Barthélemy Prosper Enfantin, 1796–1864）の主導の下に，師サン－シモンの遺作である『新キリスト教（*Nouveau christianism: Dialogues entre un conservateur et un novateur*）』（1825 年）の影響を受けて宗教色を強め，1829 年暮れにはサン－シモン教団として宗教セクト化していく。[38] 連続講演会も，第一年度には宗教色は後景に隠れているが，1829 年 11 月 18 日に始まる第二年度となると宗教の問題が前面に押し出されてくる。[39] そこで問題となってくるのが，コント「三段階の法則」は，自分たちの構想する人類の宗教的未来を予め断罪しているのではないか，という懸念である。「神学的段階」から「実証的段階」へという移行は，宗教と科学を対比的に捉え，宗教を否定する歴史認識と受け取ることも可能だからである。それゆえ，第一年度の 17 回の講演のうち，第 14 回は「実証科学は無宗教であるという主張から生まれる反論」（1829 年 7 月 1 日），第 15 回は「サン－シモンの弟子，オーギュスト・コント著『産業者の教理問答』第三篇に関する余談」（1829 年 7 月 15 日）と題され，コントの三段階論批判に当てられている。[40]

コント三段階論と宗教の関係については，さらに，コント自身の生涯が問題を複雑にしている。三段階論で実証主義を主張したコントが，晩年には「人類教」を創設し，宗教家となったこと，しかもコント自身が初期からの一貫性を主張していることは，コント研究史のうえで一つの問題となっ

（36） Henri Fournel, *Bibliographie saint-simonienne de 1802 au 31 décembre 1832*, Paris: Alexandre Johanneau, 1833, p.63.

（37） *Doctrine de Saint-Simon*, p.443, note 308.

（38） サン－シモン『新キリスト教』において繰り返し強調されるのは，「最も多数で最も貧しい階級の物理的，精神的境遇の改善」のために「人間はお互いに兄弟として振る舞わなければならない」という格率であり，これを必ずしも「宗教」として捉える必要はないと考える。サン－シモンの「産業」的世界においては，「出生による不平等の撤廃」に基づく「各人の能力の自由な発展」が目指され，結果の平等は否定されていた。晩年に至って，『新キリスト教』で，諸個人の努力や能力の欠如に還元されえない「社会的貧困」が問題視されたことは，これまでの主張を補完する意味をもっている。高草木光一「サン－シモン――『産業』への隘路」，大田一廣編『社会主義と経済学〈経済思想 6〉』日本経済評論社，1995 年，所収，参照。

（39） 第二年度の講演会 13 回の内容は次のとおりである。「第 1 回――第一年度の解義の要約。1829 年 11 月 18 日。第 2 回――キリスト教の出現時の世界の状態。人類の必要に対するキリスト教教義の適合化。精神的権力と世俗的権力との間の，教会と国家との間の，中世に確立された分割の基礎。1829 年 12 月 2 日。第 3 回――精神的権力と世俗的権力。1829 年 12 月 30 日。第 4 回――西欧における精神的権力と世俗的権力。1830 年 1 月 27 日。第 5 回――精神的権力と世俗的権力。1830 年 1 月 27 日。第 6 回――キリスト教教義。1830 年 2 月 24 日。第 8 回――教義に関する反論への回答。1830 年 3 月 24 日。第 9 回――社会的次元における三位一体教義の翻訳。1830 年 4 月 7 日。第 10 回――聖職者。1830 年 4 月 21 日。第 11 回――学者。1830 年 5 月 19 日。第 12 回――産業者。1830 年 5 月 19 日。第 13 回――位階制。1830 年 6 月」。Fournel, *op.cit.*, pp.74–75.

（40） cf. *Doctrine de Saint-Simon*, pp.443–482. 野地訳，263–297 頁，参照。

ている。[41]

さて，デュルケーム（Emile Durkheim, 1858–1917）にしたがって，「実証主義」の源泉をコントではなくサン－シモンに求めると，澤瀉の「三つの型」という理解が，実証主義の歴史的解釈のうえで大きく道を踏み外しているものではなく，むしろその本質に迫るものであることがわかってくる。

サン－シモンは，処女作である『同時代人に宛てたジュネーヴの一住人の手紙』（1803 年）においては「実証的（positif）」という言葉を使ってはいないが，事実上，実証的な人間科学，社会科学のあり方をすでに主張している。当時隆盛だった生理学を自らの体系のなかに取り込んで，人間の身体に適用される「個体」の生理学を「社会」の生理学にまで拡張，応用しようとする意図を読みとることができる。それは，もっぱら「観察された事実」に基づくものであり，「想像された事実」に依拠する啓蒙思想に対する訣別を宣言している。「生理学者たちは彼らの社会から哲学者，モラリスト，形而上学者たちを追い出さなければなりません。天文学者たちが占星術師らを追い出し，化学者たちが錬金術師らを追い出したように」。[42]

サン－シモンに関する伝記的研究のなかでフランク・マニュエル（Frank Manuel, 1910–2003）は，ここに「迷信と形而上学からの，天文学（物理学を含む），化学，生理学の継起的解放を叙述することによる諸科学の階層序列の観念，実証主義理論の胚芽版」[43]を確認している。そして，『十九世紀の科学的研究序説（*Introduction aux travaux scientifiques du XIX*^{e} *siècle*）』（1807–8 年）を経て，『人間科学に関する覚書』（1813 年）に至ると，サン－シモンは明確に「実証科学（science positive）」としての新しい人間科学を構想するようになる。「十五世紀以来，人間精神はそのすべての推理を観察され検証された諸事実に基づかせる傾向をたどっていること，すでに人間精神は天文学，物理学，化学をこの実証的基礎の上に再組織したこと，これらの科学は今日では公教育の一部となっていること，がわかる。ここから，人間科学を一部分として含む生理学はほかの物理的諸科学で採用された方法によって扱われるようになるであろう，そして生理学は実証的になった暁に公教育にとり入れられるであろう，という結論が必然的に導き出される」。[44]

デュルケームは，「社会主義」に関するボルドー大学での講義を締めくくるにあたって，サン－シモン体系の中心に見いだした三傾向，三つの思想として，「実証科学の方法と……歴史的方法を社会諸科学に拡張するという思想，宗教的革新の思想，そして，社会主義的思想」[45]を挙げている。一見

---

(41) 清水幾太郎「オーギュスト・コント」，『清水幾太郎著作集 18』講談社，1993 年，142 頁。

(42) Saint-Simon, “Lettres d’un habitant de Genève à ses contemporains,” *Œuvres complètes*, tome I, pp.117–118. 森博訳「ジュネーヴの一住人の手紙」，『サン－シモン著作集』第 1 巻，60 頁。

(43) Frank Manuel, *The New World of Henri Saint-Simon*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1956, p.132. 森博訳『サン－シモンの新世界』恒星社厚生閣，1975 年，上巻，226 頁。

(44) Saint-Simon, “Memoires sur la science de l’homme,” *Œuvres complètes*, tome II, p.1075. 森博訳「人間科学に関する覚書　第 1 分冊」，『サン－シモン著作集』第 2 巻，11–12 頁。

矛盾するかに見えるこの三つの思想は，サン－シモンにおいて「十九世紀の精神そのもの[46]」として矛盾せずに緊密に結びついていただけではなく，デュルケームの時代においてもなお，結びつきうるものであることが示されている。

澤瀉は，コント「三段階論」の「段階」を「型」として読み替えるという強引な手法によって，自然科学の優位性を否定しようとした。しかし，このように実証主義をサン－シモンにまで遡って検討することによって，「実証主義」が淵源において宗教的革新や社会主義的理念と一体的なものとして「時代の精神」を形成していたこと，宗教的革新や社会主義的理念もまた実証的なものとして捉え返されていたことがわかる。自然科学的な観察科学に純化されたかに見える「実証主義」を相対化しようとした澤瀉の意図は，サン－シモンやコントの思想とそう遠いところにあったわけではなかった。ただし，澤瀉は，そのための手続きをあまりにも簡略化しすぎたと言えるだろうし，辻村がどこまで澤瀉の意図を「理解」していたかどうかも疑わしい。

「実証」を「直観」という対極にあるものと同一視するという澤瀉の荒技の背景には，ベルクソンの影が見えるという点はすでに指摘した。日本におけるベルクソンの受容は，明治末年からはじまり，1910 年代には「ベルクソン大流行」という事態に至ったと言われている。その後下火となったものの，1941 年のベルクソンの死を契機に，もう一度ベルクソンが日本の論壇で取り上げられるようになる[47]。つまり，澤瀉が大阪帝国大学で「医学概論」講義を始めたのは，ちょうどベルクソン再ブームのときに当たっていた。

1890 年代に現れたフロイト（Sigmund Freud, 1856–1939）やベルクソン等の一群の思想家を，思想史家のヒューズ（H. Stuart Hughes, 1916–1999）は「実証主義への反逆[48]」という相で括っている。フロイトにせよベルクソンにせよ，これまでの実証主義によって客観的に捉えることのできなかった主観的で非合理的な世界が探求の対象となっていく。フロイトの『夢判断』（1900 年）は夢のなかの「無意識」の世界に足を踏み入れ，ベルクソンは『意識に直接与えられたものについての試論（*Essai sur les données immédiates de la conscience*）』（1889 年）において，空間的な分節化に過ぎない「時間」とは異なる，内省によってのみ感得することのできる意識の流れとしての「持続（durée）」を提起している。

ヒューズの言う「実証主義への反逆」は，必ずしもコントを標的にしているわけではない。「実証主義」は，「自然科学からの比喩によって人間の行動を論議する傾向全体を特徴づける用語[49]」として

（45） Emile Durkheim, *Le socialisme, ses définition, ses débuts, la doctrine saint-simonienne*, édité par M. Mauss, Paris: F. Alcan, 1928, p.348. 森博訳『社会主義およびサン－シモン』恒星社厚生閣，1977 年，275 頁。

（46） *Ibid.*, p.298. 森訳，239 頁。

（47） 宮山昌治「大正期におけるベルクソン哲学の受容」，『人文』4 号，学習院大学人文科学研究所，2005 年，宮山昌治「昭和期におけるベルクソン哲学の受容」，『人文』5 号，学習院大学人文科学研究所，2007 年，参照。

当時かなりルーズな使われ方をしていたと言う。しかし，いずれにせよ，ベルクソンが徹底的な反実証主義，反科学主義の立場を表明していたことは間違いない。

澤瀉が「実証」を「直観」というベルクソンの用語で読み直そうとしたのは，まさにベルクソンによって実証主義を事実上批判し，「自然科学からの比喩によって人間の行動を議論する傾向」によって基礎づけられた近代医学を相対化することを目指していたと考えられる。ベルクソンは，ラヴェソン（Jean Gaspard Félix Ravaisson-Mollien, 1813–1900）の『一九世紀フランス哲学』（1867年）におけるコントへの言及を基にして，コントにおける実証主義の生物学への適用に関して揶揄するような文章を残している。(50)

「オーギュスト・コントの『実証哲学講義』の第一巻を開いて見よう。そこには生命体において観察される現象は無機的事実と同じ本性のものだと書いてある。八年後に出た第二巻〔第三巻の誤り——高草木〕にコントは植物に関してなお同じ言い方をしているが，植物だけに限っているので，すでに動物の生命を別にしている。そうして最後の巻においては生命現象の全体を物理的化学的事実からはっきり分離させている。コントは生命の顕現を考察すればするほど，さまざまな事実の秩序のあいだに単に単純複雑の区別ばかりでなく，順位もしくは価値の区別を設けるようになっていった。ところで，この方向をたどっていくと，結局唯心論に到達するのである」。(51)

そして，ベルクソンは，ラヴェソンに依拠しながら，「生命の科学が発展すればするほどそれらは自然の内部に思考を取りもどす必要を感ずるようになることは予言してもいい」(52)という一つの結論を導き出す。

『実証哲学講義』の第一巻は1830年に，最終巻である第六巻は1842年に刊行されている。「人類教」に向かう前の段階で，すでにコントのなかには，生命現象の研究の進化に伴う「実証主義」理解の変化があったとラヴェソンもベルクソンも見なしていると思われる。

澤瀉は，ベルクソンの主要四著作，すなわち『意識に直接与えられているものについての試論』，『物質と記憶（*Matière et mémoire*）』（1896年），『創造的進化（*L'évolution créatrice*）』（1907年），

---

(48)(49) H. Stuart Hughes, *Consciousness and Society: The Reconstruction of European Social Thought 1890–1930*, New York: Alfred A. Knopf, 1958, p.37. 生松敬三・荒川幾雄訳『意識と社会』みすず書房，1970年，26頁。

(50) ベルクソンが依拠しているラヴェソンのコントへの言及に関しては，次を参照。Félix Ravaisson, *La philosophie en France au XIXe siècle 1867, suivie du Rapport sur le Prix Victor Cousin (Le septicisme dans l'antiquité) 1884*, Paris: Hachette, 1904, p.82.

(51) Henri Bergson, *La pensée et le mouvant: Essais et conférences*, Paris: F. Alcan, 1934, P. U. F., 2009, pp.273–274. 河野与一訳『思想と動くもの』岩波文庫，1998年，375頁。

(52) *Ibid.*, p.274. 河野訳，375頁。

『道徳と宗教の二源泉（*Les deux sources de la morale et de la religion*）』（1932 年）についての解説で，「四書は夫々ベルグソンの心理学説，生理学説，生物学説，社会学説と言うこともできよう。もっともここに言う社会学説とは『社会学』の建設者オーグュスト・コントのいわゆる有機体的関係を越えての生命体の相互関係を考察するものであり，それは動物から区別せられた人間性の反省でもあるから『人間学』或は『ユマニテの学』という方が一層適当であるかも知れない[53]」と述べ，ベルクソンの目指した点がコントの乗り越えであったことを示唆している。澤瀉の意図は，コントを真正面から批判せず，コントをベルクソン的に解釈することによって，「科学分類の法則」を可能なかぎり柔軟に理解することにあった。「各々の実証科学は一方においてそれより下位の科学を手段としながら，他面それはそれのみの有つ独自性を有しているのである。……あらたな事実をあらたなるものとして捉え，そこにあらたなる学問を作ること，それが実証科学の特色である[54]」と述べ，コントにおいて重要な諸科学間の「継承」部分よりも新たな「開拓」部分に力点を置いている。そして，その「開拓」部分が拡大して行けば，ベルクソンが言うように実証科学はその対立物である「唯心論に到達する」ことにもなってしまう。澤瀉が「実証」と「直観」を同一視するのも，こうした大きな実証主義批判のヨーロッパ的文脈のなかでのことであったろうと思われる。

『医学概論　第一部　科学について』は，このように隠されたコント・ベルクソン関係を読みとることによって，澤瀉の近代実証主義批判の意図が浮かび上がってくる。『医学概論　第二部　生命について』では，デカルトに対するメーヌ・ド・ビラン，ラヴェソンの身体論の系譜が重要視されている[55]。そして，『医学概論　第三部　医学について』では，デカルト対ベルクソンの対立関係が主軸に置かれることになる。

澤瀉『医学概論　第三部』では，セリエ（Hans Selye, 1907–1982）のストレス説，ソ連のネルヴィズムと並んで，漢方医学が新しい医学のあり方として取り上げられている。その漢方医学をベルクソンの視点から捉えようとしたところに澤瀉のフランス哲学者としての真骨頂がある。

澤瀉は，漢方医学を西洋医学のカテゴリーで理解することに警告を発し，近代医学と漢方医学は根本的にその世界観を異にすると断言している。そこで適用された対立軸が，デカルトとベルクソンである。「西洋医学を基礎づけるのはデカルトの哲学であるのに対して，漢方医学を基礎づける思想を西洋哲学の流れに求めるとすれば，まずベルクソンの哲学をあげるべきではないかと考える[56]」のである。

デカルトは，晩年に未完の論文「人体の記述」を書いていたこともあり，「確実な医学をつくるこ

（53） 澤瀉久敬「ベルグソン哲学への手引き」，坂田徳男・澤瀉久敬編『ベルグソン研究』勁草書房，1961 年，12 頁。

（54） 澤瀉『医学概論　第一部』，124 頁。

（55） 澤瀉久敬『医学概論　第二部　生命について』創元社，1949 年，オンデマンド版，誠信書房，2007 年，100–101 頁。

（56） 澤瀉久敬『医学の哲学』誠信書房，1964 年，増補オンデマンド版，2007 年，205 頁。

とこそデカルトの終生の願いであった[57]」と澤瀉は捉えている。それゆえ，デカルトと近代西洋医学との結びつきは直接的だった。それに対して，ベルクソンは医学についてまとまった見解を示していないが，人間の身体の捉え方に特徴があると澤瀉は言う。ベルクソンは，人間をまず「生物」と捉え，しかも「意識をもった生物」と考える。そして，その身体は「生理的機能的」で「時間的な全体」である。また，生物のなかでもとくに人間は「能動的主体的」なものであり，それが「個人の個性」とも結びついている[58]。このような澤瀉のベルクソン理解は，先に触れた澤瀉の「六面的人間像」のうちの第二規定から第六規定までの基礎をなしている。結局，澤瀉の言う六面性とは，デカルトの「物体」（第一規定）とベルクソンの人間把握とを総合したものであることがわかる。

デカルト的な西洋医学が，分析的医学，客観的医学であるのに対して，ベルクソン的な漢方医学は総合的医学，主観的医学ないしは直観的医学であるとされる。それは，「空間の医学」と「時間の医学」と置き換えることもできる。デカルト的な近代医学の決定的な陥穽は，そこに「時間」の概念が想定されていないことである。病気を無時間的にしか見ることができないために，局所療法に陥らざるをえない。「デカルトが確立した自然科学は生命のない物質を解明し利用するためにはまことにすばらしい道具である。しかし，それは生命の理解には適しない[59]」。それは，「時間」を内蔵した「生命」を動的発展的，発生的な立場で捉えることができないと考える。

「時間の医学」である漢方医学は，「病気」ではなく，心身統一体としての「全人」を対象として，内から眺めた意識的事実，すなわち患者自身の自覚的症状を重視し，その対象のなかに入り込む「直観」的方法によって，「病人」の全身的症状の時間的経過を動的に捉えることができる，と考える。それは，同時に病人の「個性」を重視する治療になるだろう。

もちろん，澤瀉は漢方医学の絶対的優位性を説いているわけではないが，少なくとも現在の「空間的医学」が，「時間」と「個性」を無視していることに対するアンチテーゼとしての意味を評価すべきであると主張している。

このように見てくれば，澤瀉『医学概論』は，ベルクソンがヨーロッパ思想史のなかで試みた「近代の超克」を医学の世界に移行させ，「近代医学の超克」をテーマにした壮大な思想書であったと言うことができるだろう。

---

(57) 澤瀉久敬『医学と生命』東京大学出版会，1967 年，52 頁。なお『人体の記述（*La description du corps humain*）』は，死後の 1664 年に刊行されている。*Œuvres de Descartes*, publiées par Charles Adams & Paul Tannery, nouvelle éd., Paris: J. Vrin, 1996, tome XI, pp.217–290. 山田弘明「デカルトと医学」（『名古屋大学文学部研究論集』150 号，哲学 50 号，2004 年）に部分訳がある。

(58) 澤瀉『医学と生命』，54 頁。

(59) 澤瀉『医学の哲学』，207 頁。

III　カンギレムと澤瀉久敬の間

フーコー（Michel Foucault, 1926–1984）にも大きな影響を与えたと言われ，現在でも広く読まれているフランスの哲学者カンギレム（Georges Canguilhem）は，1904 年に生まれ，1995 年に没している。偶然にも，澤瀉と生年も没年も同じである。両者には，生没年だけではなく，いくつかの共通点が見られる。澤瀉が偶然 1941 年に哲学から医学の道へ入ったのに対して，カンギレムの医学への関心も，30 歳代になってからだと言われている。哲学者アラン（Alain, 本名：Emile-Auguste Chartier, 1868–1951）の影響下で，「オーギュスト・コントにおける秩序と進歩の理論」と題する卒業論文を書き，「分析的医学」を批判するアランディ（René Allendy, 1889–1942）に触発されて，医学哲学の方向が定まっていく。[60] 1943 年にストラスブール大学に提出した学位論文「正常と病理に関するいくつかの問題についての試論（Essai sur quelques problèmes concernant le normal et le pathologique）」は，現在でも広く参照される『正常と病理』の第一部にあたる。この論文は 2 章で構成され，第 1 章「病理的状態は，正常な状態の量的変化にすぎないか?」は，I　問題の導入，II オーギュスト・コントおよび〈ブルセの原理〉，III　クロード・ベルナールおよび実験病理学，IV ルリッシュの考え，V　理論の意味，となっている。[61]

カンギレムの日本への紹介は，澤瀉の後継者である中川米造によってなされるが，それは 1960 年代以降のことであり，[62] 澤瀉が『医学概論　第一部　科学について』を上梓する際にカンギレムの業績を知っていたことは考えられない。にもかかわらず，構成的にはカンギレムの著作と澤瀉の著作との間には親縁性を見いだすことができる。

カンギレムは，パリ臨床学派の医師ブルセのコントへの影響の検討から，正常と病理の区別という医学的なテーマを始める。澤瀉が「三段階の法則」や「科学分類の法則」といったコントの基礎的な範疇のみを扱い，その歴史的コンテクストについては，ブルセもサン－シモンも考慮しなかったのとは対蹠的である。ラヴェソンによれば，「『実証哲学』ないし『実証主義』の名の下にオーギュ

---

(60)　cf. Dominique Lecourt, *Georges Canguilhem*, Paris: P.U.F., 2008, pp.9–50. 沢崎壮宏・竹中利彦・三宅岳史訳『カンギレム——生を問う哲学者の全貌』クセジュ文庫，白水社，2011 年，11–53 頁，参照。なお，アランのコント評価については次を参照。Alain, *Les idées et les ages*, 1927, reproduit in *Les passions et la sagesse*, éd. de G.Bénézé, Pléiade, Gallimard, 1960. 原享吉訳『思想と年齢』角川文庫，1955 年。Alain, *Abrégés pour les aveugles: Portraits et doctrines de philosophes anciens et modernes*, Paris: Paul Hartmann, 1943. 橋本由美子訳『小さな哲学史』みすず書房，2008 年。

(61)　*Le normal et le pathologique*, Paris: P.U.F., 1966. 滝沢武久訳『正常と病理』法政大学出版局，1987 年。

(62)　中川『医学の弁明』，186–206 頁。中川米造「カンギレム」，澤瀉久敬編『現代フランス哲学』雄渾社，1975 年，所収。

スト・コントによってつくられた学説は，二つの起源をもっていた。一つは，サン－シモン主義の理論であり，もう一つは骨相学者（phrénologistes），とりわけブルセの理論である」[63]。ブルセは，大著『いらだちと狂気について（*De l'irritation et de la folie*）』（1828 年）において，病気の諸現象は健康の諸現象と本質的に一致し，強度によってしか異ならないことを主張した。コントにとっては，形而上学的，内省的心理学に対し実証的立場から批判する根拠を与えてくれる著作である[64]。

また，カンギレムに大きな影響を与えたと言われるアランディは，澤瀉『医学概論』にも決定的な影響を与えていたと思われる。カンギレムの評伝の著者ルクールは，アランディを第一級の人物と認めたうえで，アランディの医学批判の側面をカンギレムは受け継いだものの，「ホメオパシーや伝統医学に対するアランディの個人的解釈を容認しなかった」[65]と述べている。アランディは，反パストゥール（Louis Pasteur, 1822–1895），反細菌学主義を貫いて近代西洋医学の主流を批判し，ハーネマン（Samuel Hahnemann, 1755–1843）のホメオパシー理論を全体医学として評価している[66]。では，カンギレムのアランディ評価の根幹はどこにあったのか。

アランを中心とする『自由語録（Libres propos）』誌（1929 年 8 月 20 日）に，カンギレムはアランディ『医学思想の動向』の書評を掲載している。そこで，カンギレムは，アランディの主題である「分析的医学と総合的医学」の対立を，「病気の医学と病人の医学」の対立と捉え返したうえで，医学における「個人」の問題を提起する。「人類の恩人」たるパストゥールによって，医学は抽象化，一般化されたが，あくまで人間の身体は個別的である。生物として個別的であると同時に精神をもつ存在としても二重に個別的であらざるをえない。細菌学の発想は，病気を抽象化，一般化して，病人の個別性を捨象してしまうところに問題が存する。こうして，一律的な「安上がりの健康」と対抗的な，生身の人間に寄り添った加療が期待され，「個人」を重視するアランディへの支持が表明されている[67]。

澤瀉『医学概論　第三部』の最大の主張点は，すでに見てきたように，「物理化学的機械論的分析的医学」から「綜合医学，全体医学」へ，であると把握することができる。そして，その「綜合医学，全体医学」の具体例として，ハンス・セリエ，ネルヴィズム，漢方医学の三つが取り上げられた。澤瀉が「物理化学的機械論的分析的医学」と「綜合医学，全体医学」について叙述している箇所

（63） Ravaisson, *op.cit.*, p.54.

（64） コントは，ブルセのこの大著が出た 1828 年に，「いらだちに関するブルセの概論の検証」という論考を著している。Auguste Comte, “Examen du traité de Broussais sur l'irritation,” *Œuvres d'Auguste* Comte, tome X–B, pp.216–228. cf. Jean-François Braustein, *La philosophie de la médicine d'Auguste Comte*, Paris: P.U.F., 2009.

（65） Lecourt, *op.cit.*, p.34. 沢崎ほか訳，37 頁。

（66） René Allendy, *Orientation des idées médicales*, Paris: Au sans pareil, 1929, p.37. 櫻澤如一訳『西洋医学の没落』先進社，1931 年，40 頁。

（67） Georges Canguilhem, “A la gloire d'Hyppocrate, Père du témperament,” *Œuvres complètes*, tome 1, Ecrits philosophiques et politiques 1926–1939, Paris: J. Vrin, 2011, pp.248–251.

では，直接にはアランディは引用されていないが，ヒポクラテス（Hippocrates, BC460?–BC370?）から「物理化学的機械論的分析的医学」の祖形であるガレノス（Galenus, 129?–200?）が分岐していく医学史の叙述においては，アランディの著作『医学思想の動向』が使われている。[68]

最終的にベルクソンを使って「綜合医学，全体医学」としての東洋医学の意義を訴える澤瀉に根源的なインスピレーションを与えたのはアランディと思われる。アランディによって医学を大きな二つの傾向性で見る基礎視角を与えられ，ベルクソン哲学を経由して，「時間」と「個性」を尊重する東洋医学へという回路が形成されたと考えることができる。

奇しくも，同じ 1904 年に生まれ，同じように哲学から医学の道に入った澤瀉とカンギレムは，同じアランディの著作『医学思想の動向』によって大きく方向づけられている。ヨーロッパと日本との間で思想的な交流がきわめて乏しいなかで，澤瀉とカンギレムは期せずして同じ地点から，近代医学を相対化する内在的な視点を獲得していた。

しかし，カンギレムが，「ホメオパシーや伝統医学に対するアランディの個人的解釈を容認しなかった」のに対して，澤瀉は，伝統医学としての東洋医学へとまっすぐに突き進んだ。いや，アランディを一挙に飛び越えて，東洋医学にのめり込んでしまったと言ってもいい。ここには，アランディの著作それ自体に対する読み方の問題とともに，アランディの邦訳書の問題があった。

澤瀉は，『医学概論　第三部　医学について』では，アランディの原書のみを表記し，邦訳書を掲げていないが，澤瀉が邦訳書を参照していることは，彼の蔵書目録からも明らかである。[69] そして，その邦訳書が問題だった。

邦訳書は，ドクトル・ルネ・アランヂイ著，櫻澤如一訳『西洋医学の没落』（先進社，1931 年）である。当時，相当に読まれ，医学界にも影響が大きかったと思われる。中川米造は「本当に医学とは何であるかを教えて呉れるものは誰であるのか。あまりにもわれわれは分析的傾向に頼りすぎた。もっと人間は，生きた存在として全体として，見なければならない。其の点で東洋医学に目をつけよう，と唱え出したのは，寧ろヒュボッター，アランジー等の西洋人だった」[70] と述べているが，これは明らかに邦訳書に引きずられた解釈であろう。邦訳タイトルは，世界的ベストセラーとなったシュペングラー『西洋の没落』（1918–1922 年）を模したものだろうが，アランディの主張は「西洋医学の没落」とも「西洋の没落」とも無関係である。邦訳書は，「西洋医学の没落」という邦題に相応しい訳者解説と漢方医・中山忠直（1895–1957）による跋文をつけ，原著者の意図を損なわせている。

訳者・櫻澤如一は，アカデミックなキャリアをもたず，石塚左玄（嘉永 4–明治 42，1851–1909）の食養論によって自身の健康を回復した経験から，石塚を崇敬し，のちにマクロビオティック運動を展

（68） 澤瀉『医学概論　第三部』，81 頁。

（69） そもそも原書は，澤瀉の蔵書目録にも存在せず，かつ 2013 年 1 月の段階で CiNii Books（国立情報学研究所）で調べても全国の大学図書館に一冊も所蔵されていない。

（70） 中川米造「医学概論序説」，『芝蘭会雑誌』45 号，1947 年。

開した人物である。大阪大学医学部において,「医学概論」に隣接する「公衆衛生学」を担当し，澤瀉と人間的な交流もあった丸山博（1909–1996）は，この櫻沢にすっかり魅せられていた。丸山は,「アルファ・インデックス」の考案など,「衛生統計学」の先駆的な業績を残しているが[71]，櫻澤への熱狂的な思い入れは，現在の冷静な目で見れば常軌を逸したものと映るかもしれない。

「桜沢先生が，玄米を中心とした日本食を正しく食べるだけで，自然医学によって，西洋医学から見放された重病人を治してこられたことは，自然食・健康食が注目されだした最近でも知る人も多いようですが，これは先生の仕事の第一歩にすぎなかったのです。

健康な精神は健康な肉体に宿るという動かしがたい真理の具体化，人間の健康と世界の平和を一体のものとしてとらえ，実現しようとしたG・O先生は医学者であり，哲学者であり，詩人でした[72]」。

ここに言う「G・O先生」は,「Georges Osawa」すなわち櫻澤如一を指している。

櫻澤は，訳書『西洋医学の没落』の一貫した目的は,「西洋の科学，類似科学，形而下学は申すに及ばず哲学，形而上学まで一切を否定し，かくの如き無智迷惑の上に，数千年来厳然として不動に聳ゆる東洋哲学形而上学を君臨せしめ[73]」ることであるとしている。さらに,『自然医学としての神道』（1936年）では,「西洋医学」の対抗概念として,「東洋医学」ではなく「自然医学」を置き,「治療医学から予防医学へ——予防医学から自然医学へ[74]」の標語の下に,「完全なる穀食」を推奨する。「それが我皇祖皇宗の示された国民食である。それこそ我々の祖先が三千年間実行して来た処である。三千年の試験済み証明付きである[75]」とまで言っている。言わば，近代西洋医学に一切内在せずにそれを否定しつくすところに，櫻澤の特質がある。デカルトであれ，コントであれ，ベルクソンであれ，ヨーロッパ近代思想に内在するところから近代西洋医学を批判しようとする澤瀉の視座とは本来重なり合わないはずである。ところが，議会制民主主義や資本主義という近代の所産を根底的に再検討するという，それ自体としてはこのうえなく真摯で深遠な「近代の超克」の試み[76]が，ファシズム期にあって「大東亜共栄圏」のイデオロギーと化してしまうように，時代がこの本来合わないはずの澤瀉と櫻澤を結びつける。澤瀉はアランディの原書ではなく，櫻澤の邦訳書の徹底してヨーロッパ排撃的な精神に明確に影響されている。澤瀉は，櫻澤『自然医学としての神道』も引用し[77]，『西

---

(71) 白井泉「乳児死亡の構造と丸山博のアルファ・インデックス——新生児死亡=母胎・母体を取り巻く生活環境指標の発見」,『三田学会雑誌』99巻3号，2006年10月，参照。

(72) 丸山博「私のあった人——命にいのちをかけた人」(1978年),『丸山博著作集3　食生活の基本を問う』農山漁村文化協会，1990年，296頁。

(73) 櫻澤訳『西洋医学の没落』，11頁。

(74) 櫻澤如一『自然医学としての神道——祝詞の生理学』食養会，1936年，141頁。

(75) 同書，185頁。

(76) 河上徹太郎・竹内好ほか『近代の超克』冨山房百科文庫，1979年，176頁，参照。

洋医学の没落』跋文の筆者である漢方医，中山の同じようにヨーロッパ排撃的な『漢方医学の新研究』（宝文館，1927 年）も引用しているのである。[78]

澤瀉が大阪帝国大学で「医学概論」の講義を始めた 1941 年から『医学概論　第一部』が刊行される 1945 年までの時代的特徴は，「人的資源」の国家管理であると見なされる。その政策は，遺伝性とされた病者への断種，「健常者」への多産奨励，体力管理・健民運動といったかたちで具現化していく。一言で言えば，「健康」の義務化と非「健康」者の排除の一体化の時代と言えるだろう。[79] このような「体力の時代」において行なわれた澤瀉「医学概論」講義が「国民」の統制・規律化と無縁でありえたのか，という問いは立てられるだろう。戦時下で書かれた『医学概論　第一部』が「不幸な時代」の痕跡をとどめているのはやむを得ないとしても，1959 年に刊行された『医学概論　第三部』にまでその痕跡が引き継がれているとしたら問題であろう。敗戦から 14 年が経ち，翌年には安保闘争が控えているときだから，戦時色は一掃されていてよいはずである。

「八時間労働が従来の健康人の正常さであるなら，もし十時間なり十二時間なり労働してもなお何らの疲労もみせぬ身体をもちうるとするなら，これは明らかに健康の増進ということではなかろうか」。[80]

「健康とは長寿であるとのみ考えて，『個人の死を延期して民族人類全体の死期を早める』ようなことがあっては大変である」。[81]

「更に公衆衛生には，優生学的見地からも善処すべき多くの問題をもっている」。[82]

労働力の増強をもって「健康増進」とする見方は，たとえ比喩であったとしても，「体力の時代」の「人的資源」への統制的まなざしと見なされうるし，何よりも，「優生学」に対して肯定的と思える言辞は看過できない。澤瀉は別の箇所では，「弱い者への同情こそ，医療の出発点である」[83] と言い，「安楽死，断種，妊娠中絶」には「生命の畏敬」の立場から否定的な立場をとっている。[84] おそらく澤瀉は自覚的には優生学や優生思想に与していないと思われるが，その発想が澤瀉の思考のなかに忍び込んでいると考えることも可能である。それが窺えるのが，アランディの訳者である櫻澤如一が訳しているアレクシス・カレル『人間，この未知なるもの』への評価である。カレル（Alexis Carrel,

（77） 澤瀉『医学概論　第三部』，21–22 頁。
（78） 同書，146 頁。
（79） 鹿野政直『健康観にみる近代』朝日新聞社，2001 年，藤野豊『厚生省の誕生——医療はファシズムをいかに推進したか』かもがわ出版，2003 年，参照。
（80） 澤瀉『医学概論　第三部』，10 頁。
（81） 同書，21 頁。なお，この文中の引用は，櫻澤如一『自然医学としての神道』，156 頁，からのものである。
（82） 澤瀉『医学概論　第三部』，64 頁。
（83） 同書，290 頁。
（84） 同書，293 頁。

1873–1944）は，1912 年にノーベル生理学・医学賞を受賞した人物で，この著作はベストセラーとなった。

「『何よりも我々の従い守る可きは努力の法則である。この必要を忘れる時，個人も民族もその代償として身体と精神の退化を支払わねばならぬ』というカレルの言葉を我々はかみしめて味わねばならない[85]」。

これは，『医学概論　第二部』における引用であるが，『医学概論　第三部』でもこの著作は引用され[86]，澤瀉はカレルに大きな敬意を払っているように思える。しかしカレルのこの著作は，一読すれば直ちに優生思想に基づいて書かれたものであることがわかるし，わからなければならない。たとえば，第八章では，「精神病や精神低劣や，又は癌のやうな，あまりにも重い遺伝性の悪傾向をたくはへてゐる者共は，決して結婚すべきではない。他人へ惨苦の生涯を押しつける権利は何人にもない筈である。況んや，不幸な運命を背負わされたやうな子供を産む権利は全然あり得ない[87]」と断言している。ナチス・ドイツの「T4 作戦」という障害者安楽死計画の中心人物だったカール・ブラント（Karl Brandt, 1904–1948）は，ニュルンベルク医師裁判で死刑判決を受け，絞首刑となるが，その法廷でカレルのこの著作を引用して自己弁護をしている[88]。

カレルは，医学者としては，アランディのように「綜合医学，全体医学」を賞揚したわけではない。彼のノーベル賞受賞理由は，「血管縫合および血管と臓器の移植に関する業績」であり，近代医学の主流に位置づけられる人物であるが，本書『人間，この未知なるもの』は，医学者としての第一線を退いた後に一般向け啓蒙書として書かれたものである。櫻澤は，この著作のなかに「西洋科学に現はれた新らしい東洋的傾向」を見いだした。カレルの目指した「精神的，全体的，直観的考察は数千年前に東洋の聖人達によって略々完成されてゐる」と主張している[89]。そしてまた，カレルの優生思想は，「人的資源」の国家管理の時代にあった当時の日本にまさに適合的なものであったと言える。

澤瀉『医学概論』，とくに第三部は，アランディとの出会いをベルクソン研究と結びつけることによって，ヨーロッパの諸思想に内在した「近代医学の超克」を試みることができた。しかし，その

（85） 澤瀉『医学概論　第二部』，286 頁。

（86） 澤瀉『医学概論　第三部』，27 頁。

（87） Alexis Carrel, *L'homme, cet inconnu*, Paris: Plon, 1935, p.365. 櫻澤如一訳『人間，この未知なるもの』岩波書店，1938 年，373 頁。

（88） ヒュー・G. ギャラファー『ナチスドイツと障害者「安楽死」計画』（原著：1995 年。長瀬修訳，現代書館，1996 年）の訳者あとがき〔414 頁〕，参照。cf. Stefan Kühl, *The Nati Connection: Eugenics, American Racism, and German National Socialism*, New York: Oxford University Press, 1994, p.101. 麻生九美訳『ナチ・コネクション——アメリカの優生学とナチ優生思想』明石書店，1999 年，177 頁，参照。

（89） 櫻澤訳『人間，この未知なるもの』，2–3 頁。

アランディとの出会いを仲介した櫻澤の影響によって，澤瀉の関心はアランディを越えて，戦時イデオロギーとしての東洋思想，人的資源観，優生思想へと導かれていく[(90)]。「時間」概念の導入と「個性」の重要視によって「近代医学」を大胆に批判する画期的な視点をもちながら，ヨーロッパ哲学研究者としてその視点を貫徹させることはできなかったように思われる。これは，ひとり澤瀉だけの問題ではなく，広く京都学派の「近代の超克」論に共通する問題とも言えるだろう。少なくとも，本稿において，澤瀉『医学概論』が，ヨーロッパの思想潮流の最先端を鋭敏に感得しつつ，医学の分野における「近代の超克」を試みた著作であり，医学を超えた思想書として読みうることは確認できたと考える。

（経済学部教授）

---

(90) 戦後に至っても櫻澤に崇敬の念を抱いていた阪大公衆衛生学の丸山博は，しかし，1950 年の著作『公衆衛生』（三省堂）では，「人的資源（兵力として徴兵，労力としての徴用）のために，厚生省は全力をあげた」，「終戦となって，衛生行政もすっかり変わったわけです。戦争に使うための国民の体力向上ではなく，個々の人のそれぞれのからだの状況に応じて健康を進めようとするものです」と指摘し，「健康」観に関して，戦前・戦中と戦後の間に明確な線引きをする自覚をもっていた（『丸山博著作集 2　いま改めて衛生を問う』農山漁村文化協会，1989 年，141 頁，153 頁）。

なお，澤瀉だけではなく，中川米造もまた，戦後の 1947 年の時点で，アランディと並んでカレルを「医学概論」的著作として賞揚している点には留意したい。「医学に必要なのは，人生の幸福のために必要であるのは，この意味の医学概論であって，決して概論的紹介でもなければ，単なる批判的な医論理学に終ってもならないのである。アランジーの“西洋医学の没落”。キャレルの“人間この未知なるもの”。……等々の書はその部類に属せしむべきものであろう」（中川「医学概論序説」，『芝蘭会雑誌』45 号，1947 年）。